関西農業史研究会第347回例会　　　　　　　　　　 　　2016.1.9

日本農業の展開－古代から中世－

伏見元嘉

序章　問題意識

　　　古島敏雄氏が構築された「農業史」に半世紀を経た今日も依拠する所が多く、戸田

芳実氏や網野善彦氏が古代～中世の諸問題で古島農業史では疑問の解決には至らない

ことを四半世紀前に指摘した以後も有効な論考が少ない。また、黒正巌氏が手掛けら

れた「農史」も、その後海外研究や個別事例研究に特化している。両氏の研究を継承

して「稲作文化」の始まりから中世までを再見し、「叩き台」を供して硬直化した史学

研究に刺激を与えたい。（第323回例会報告「日本古代中世農術の展開」を補足・補正するもの

で、「農術」の範囲をはみ出したので表題に変更した。）

1. 古代の畠（畑）作

　（1）農業の始まり

 ・　石器時代の野焼き（狩りと半栽培？）。

　　　・　縄文時代にはナラ林文化圏での堅果樹移植、豆の園芸的栽培が行われていた。

　　　・　古代環境（寒冷化による環境変化。海退現象）。

　　・　照葉樹文化圏の岡山県貝塚遺跡で小麦・ハトムギと共にイネのプラント

　　　　オパール（約六〇〇〇年前）、彦崎貝塚で陸稲のプラントオパールが、姫笹原遺

　　　　跡ではイネのプラントオパール（約四五〇〇年前）、南溝手遺跡では稲籾の圧痕

　　　　（約三〇〇〇～四〇〇〇年前）と、岡山県で集中的に検出。イネは青森県、福

　　　　岡県、熊本県、宮崎県と広い範囲で検出。→アワ・麦など随伴→焼畑？

 ・　宮崎県桑田遺跡(縄文時代晩期）でイネの（熱帯ジャポニカ種）プラント・オパ

　　　　ールを検出している。→焼畑。

　　・　畠作で量を求めるには。畠作主流の中国を原宗子氏の『斎民要術』、井黒忍氏の

　　　　「中国水利」研究に求めて比較。→肥料・道具・風土・植生から焼畑の合理性。

　　　・　縄文時代末期には焼畑で二毛作が行われていた。→作物の栽培時期（麦裏作）。

　（2）畠作と水田作との差異

　　　・　水田作は湛水でのラン藻を中心とする自然の自己肥培作用を利用する。畠作で

　　　　　は流水客土（濁水）・灰肥・刈敷など肥料供給が前提となる。

　　　・　畠となる「山野」についての定義や利用法はあいまい（共有原則）。

　　　・　古代中国の井田制（畠作）「不易・一易・再易」が規定。わが国に導入時に隔

　　　　　年に租を負担する「」とされる。肥培作用からみて休耕田ではない。

　（3）史料からみた畠作

　　　・　慶雲二年（七〇五）「三品刑部親王に越前国の野一百町を賜ふ」→位田に相当。

　　　・　養老三年（七一九）九月「天下の民戸に、陸田一町以上二〇町以下を給ふ。地

　　　　子を輸すこと段ごとに粟　三升なり」→「山野（山棲み）の民」を公民化した。

　　・　養老六年（七二二）七月に「今夏雨ふること無く、苗稼らず、宜しく天下の

　　　　国司をして百姓を勧め課して、・蕎麦および大小麦を種樹し」→干害にあ

　　　　った田での畠作の推奨。田二毛作の兆項カ。

　　　・　焼畑・切替畠の盛況が近世まで存続。「山川掟」（寛文六年〈一六六六〉）焼畑禁

　　　　　止（後に解除）。

　（4）農具について

 ・　縄文時代は日常用具で行われ、そこに木製農具が登場するが考古学では土木具

 が混同されている。水田農具を含めて近世から遡及（鳥瞰する必要がある）。

 ・　古島敏雄氏の誤解

　　　　　『播磨風土記』（霊亀元年〈七一五〉頃成立）美嚢郡の条・「吉備の鉄の

　　　　　狭鍬持ち田打つ」での「狭鍬」の再解釈。（古島氏の解釈である田植え前の荒

　　　　　カキではなく、が使えない礫層の開墾に狭鍬を使った〈あくまで土木具であ

　　　　　る。実地調査〉）。→人耕には衝撃力の利用と剪断力の利用の二方式がある。

　　　・　鍬（風呂鍬・耐衝撃性に劣る土農工具）

　　　　　筒泉堯・堀尾尚志両氏の考察（律令の時代）。「一口当たり労働者数は二一人か

　　　　　ら三五人」「鍬一口当たり耕地面積が三～四町」→「鉄製農具」の普及を過大評

　　　　　価していた。

　　　・　備中国新見荘では焼畑が南北朝期に里畠に変化している。→農具と肥料の変化

　　　　　が想定できる。

　　 ・　耕起農具を近世から概観（耐衝撃性に優れた土農工具）。

 　　 　① 打鍬　　　　岡光男氏の指摘。文献初見は寛延元年（一七四八）。農具生産の

　　　　　　　　　　　　盛んな越後では一五石規模農家でも一丁しか鍬を持っていない。

　　　　② 備中鍬　　ⅰ 德永光俊氏の大和での実用過程の明示。文化五年（一八〇八）。

　　　　　（含窓鍬） ⅱ　出雲・神門「カナリ」農法（備中鍬を参考に窓鍬を作り天地返

　　　　　　　　　　　　 しと呼ばれる深耕客土法を開発。〈文化五年の伝承〉）。

　　　　　　　　　　 ⅲ　「江戸周辺で用いられるようになった」「たこ備中」「まど鍬」

　　　　　　　　　　　　（『農具便利論』文政五年〈一八二二〉）。

　　　　　　　　　　 ⅳ　山田方谷の備中松山（高梁）藩改革。鉄製造販売→農具の江戸

　　　　　　　　　　　　 直販（嘉永二年〈一八四九〉から取り組む）。

　　　　　　　→　本格的な人耕（深耕）ができるのは江戸中期以後である。

　（5）班田制度の畠作・畠の成立

　　　・　班田収授法（大宝元年〈七〇一〉）実施。陸田（畠）を班田された阿波国では定

　　　　　着し、山城国では定着しない。→農法転換の困難さを示している。

　　　・　「畠」の字は、播磨・摂津・但馬・丹波・淡路国では、天元三年（九八〇）が

　　　　　初出。

　（6）『延喜式』（康保四年〈九六七〉施行）にみる畠作

　　　・　「内膳司式」の園地（畠作）の記録。

　　　・　「左右馬寮」の糞肥の大量使用。人糞尿の使用ではない。

　　　　　　→他の役所から入手。運搬に耐える容器がない。

　　　・　今日の有機農業に遜色がない。硝酸態窒素過剰が懸念される糞肥の大量使用。

　（7）畠作の生産性と労力

 ・ 労力が多くかかる。（『清良記』記述のと比較）

　　　・　面積当たり食料供給エネルギー量。古代では米換算収量が1/10以下である。

　　　　　→「水田中心史観」とならざるを得ない。

1. イネの伝来と「古代日本型稲作」の誕生

　（1）全アジアから

　　　・　種としてのイネは照葉樹林文化によってもたらされている。→焼畑に終始して

　　　　　いるようなので除外してみる。

 ・　長江下流域で遺跡（浙江省余姚）が発掘された。（放射性炭素14C測定の

　　　　　年代が紀元前四八八〇±九〇年〈今から約七〇〇〇年前〉が、最古である。）

　　　・　田中耕司氏の稲作類型。インディカ・温帯ジャポニカ種群での田植え方式に固

　　　　　執する「中国型稲作」、インディカ種群の「インド型稲作」、温帯ジャポニカ（ジ

　　　　　ャワニカ）種群で多様な栽培を行う「マレー型稲作」。

　（2）イネの伝来経路

 ・ 田中耕司氏がマレー型稲作の琉球島嶼部から列島への北上・本土への到達の可

　　　　　能性を指摘している。→但し、琉球島嶼部で古代水田跡は検出がない。

　　　・　琉球島嶼部の稲作遺跡が検出されないのは、津波による消滅が想定できる。

 　　先島には「石垣島東海岸の津波石（つなみふうしい）群」と呼ばれる巨大な津

　　　　波石が東海岸に多数ある。

 　　　　 石垣島大浜の崎原公園内にある大津波石は、牧野清氏によって命名されました。当初は

 　　　　　1771年に石垣島を中心に大きな被害を出した、明和大津波に由来する津波石と考えら

　　　　　　れていました。しかし、炭素14による年代測定などを実施した結果約3400年前や約2000

　　　　　　年前といった年代が得られ、約2000年前の津波（先島津波）で今の場所に移動したこと

　　　　　　がわかってきました。また、地磁気を専門とする研究では、明和大津波の際、この石は

　　　　　　大きく動かなかったものの、回転するなどして地磁気が動いている可能性が指摘されて

　　　　　　います。

　　　①　明和八年の大津波では津波の高さが最大で二八丈二尺（八五・四メートル）、

　　　　　先島群島で溺死者約一二,〇〇〇人に及んだと記録されている。

　　　②　琉球島嶼部では縄文土器は砕片で出土（本土とは異相の検出状態である）。

　　　③　波照間島では縄文時代の台湾系の土器が出土。弥生土器出土はまれである。

　　　④　南洋産貝輪が本土では出土する（本土との交流は確実にある）。

　　　⑤　貝塚出土状況（高地〈台地〉のみで検出）。

　　　・　田中耕司氏などの地域学の「東南アジアでのフロンティア論」をあてはめれば、

　　　　　津波によるフロンティア活動が九州に及ぶ（本土への伝播）。→石垣島はその後

　　　　　一五世紀にならないと社会が形成されない。

　　　・　德永光俊氏の農法論「農事・農術・農蓺」、農法の伝来と受容関係（技術格差）。

　（3）「古代日本型稲作」の成立

　　　・　九州中部の桑田遺跡で熱帯ジャポニカ種のイネが検出。マレー型稲作の焼畑（縄

　　　　　文時代末期）。

　　　・　照葉樹林文化の焼畑とマレー型稲作の焼畑の技（農事）の格差・落差の少なさ

　　　　　でマレー型稲作の焼畑は受容される。

　　　・　菜畑遺跡（稲作最古の遺跡）から。

　　　①　中村純氏の遺跡全体から草木炭の検出。

　　　②　笠原安夫氏の水田雑草種の夥しい検出（大量の湿田雑草、アリノトウグサ炭

　　　　　化種の大量検出）。

　　　③　自身の実見と寺沢薫・知子両氏の越年ヒコバエからの収穫量研究から、湿地周

　　　　　辺で行われたイネを含む焼畑が湿地に及び、火耕水耨・焼田になり自生したイ

　　　　　ネから、越年株を移植する「多年生稲作法」の「古代日本型稲作」が生まれた。

　　　　　焼畑→湿地稲作へと展開している（第一二層～第九層・山の寺式土器）。

　　　④　畦塗具である諸手鍬（第八層下～第八層上より出土・夜臼式土器随伴層）を、

　　　　　大陸型石包丁、巾広鍬と共に検出。畦塗具は水田維持（湛水機能維持）の必需

　　　　　品。菜畑遺跡の諸手鍬が、わが国「最古の農具」である。巾広鍬は造田土木具

　　　　　である。湿地稲作→水田稲作へと展開している。（ホームページ「アゴラ」4号、15.4.12）

　　　・　菜畑遺跡や板付遺跡（弥生時代初期・夜臼式土器→板付Ⅰ式土器）など、九州

　　　　　北部の水田遺構で畦杭・畦板が検出される（その後の水田遺構では畦杭・畦板

　　　　　の使用はまれ。小畦の利用）。→ナラ林文化圏のアク抜きの水さらし場の技術の

　　　　　転用。→自に古代日本型稲作を創案した（ナラ林文化圏の人々の寒冷化による

　　　　　照葉樹文化圏へのフロンティア活動→両文化圏の融合と、琉球島嶼のマレー型

　　　　　稲作の北上によって生まれた）。

　　　・　縄文・弥生遺跡から出土する木製鍬の強度から、農、水田はできない（畦

　　　　　塗と均し）。一本鍬は雑草根の切断・稲の移植。小型の切り分け移植鍬。

　　　・　小畦は湛水機能を持つが、田での作業頻度が多い田植え方式の中国型稲作が行

　　　　　い難い（通行路にはならない）。→小区画にならざるを得ない。

　　　・　夜臼式土器の普及範囲が北九州に限定されている。

　　　・　焼畑での稲作より生産性は高いものの、食生活を一気に転換させるものではな

　　　　　い。→狭小水田の維持に畦杭を多用している（従来の食体系に米を加えようと

　　　　　努力している）。

　　　・　中国型稲作（「灌漑水田」稲作）に固執した見方では進展がない。

1. 稲作伝来説の検討

　　　・　大陸の政治状況、朝鮮半島の政治状況（中南部小国家群）と寒冷化による海退

　　　　　現象でフロンティア状況。→大陸・朝鮮半島で渡海するフロンティア活動が起

　　　　　こる必然がない。

　　　・　朝鮮半島の風土（太白山脈・稲作時期の降水・林相）、農業の状況・雑穀型畠作

　　　　　が主流で水田稲作が行われた痕跡と水田農具の検出が遅く極めて少ない。

　　　・　朝鮮半島の水田遺構は小区画水田が多いが、もたらした大陸で既に完成形の中

　　　　　国型稲作が行われている。（ホームページ「アゴラ」7号、2015.12.13）

1. 農業技術と随伴物からの検討

　　　・　モノ（石器・土器・青銅器など）と農業の相違。

　　　　　　→大陸系・朝鮮半島系遺物≠稲作伝来。

　　　・　夜臼式土器の誕生の意味。朝鮮半島から稲作が伝わったとすれば土器・炊飯方

　　　　　式が付随するはずで、夜臼式土器が生み出される必然性がない。

　　　・　田中耕司氏のマレー型稲作の北上指摘とフロンティア論、德永光俊氏の農法の

　　　　　伝播受容論を菜畑遺跡で照合すれば、朝鮮伝来説が否定できる。

　　　・　朝鮮半島では水田を維持する畦塗具の出土が弥生時代中期以降で、菜畑遺跡遺

　　　　　より非効率なものである。→先進性がみられない。

　　　・　逆に日本から朝鮮半島に古代日本型稲作は伝わっている。

　　　　　夜臼式土器の朝鮮半島から出土（北九州と朝鮮半島のみで出土する→北九州集

　　　　　落民のフロンティア活動・青銅器を求める活動に重複）。

　　　　　畠作と古代日本型稲作の農法格差の少なさ（小区画水田での多年生利用）。

　　　　　朝鮮半島南部と北九州の雑草の相似性（北部・中部と南部の異相）。

1. 新たな稲作技術の伝来（現行稲作につながる田植え方式の中国型稲作）

　　　・　池橋宏氏の越の亡国（BC三三四）によるフロンティア活動に伴い、田植え方式

　　　　　の中国型稲作の伝来（海洋活動を行う越の亡民）。

　　　・　有薗正一郎氏の「ヒガンバナ」伝来研究との一致（朝鮮半島・沖縄にはない）。

1. 稲作の普及

　　　・　古代日本型稲作を行う装置である水田を、狩猟の罠を仕掛ける程度の認識で造

　　　　　られて西日本に普及していた（焼畑に水田が追加される）。

　　　・　そこに中国型稲作が伝来する、受容・伝達に起こる技術格差の少なさから一部

　　　　　で受け入れられる。

　　　・　東海を境に北上の停滞がみられること（稲の耐寒性)。

1. 多年生稲作法（古代日本型稲作から焼畑を除外した部分）

　（1）イネの多年生

　　　・　減反政策下での越年株での実りの実見。寺沢薫・寺沢知子両氏の観察。

　　　・　多年生稲作法が行われていた初期遺跡の確認。

　　　・　板付遺跡での灌漑路の試行錯誤。→鉄器を使用した畦杭・畦板の検出。

　　　・　農具・土木具から多年生稲作法に中国型稲作が加わる過程（古根の処理→抜根

　　　　　具・踏み込み具・均し具。火入れ。）。

　（2）水田の開発

　　　・　湿田・常時湛水田の評価。水田の立地。

　　　・　板付遺跡。京都市白川追分遺跡。京都大学構内（両方式併存カ）。奈良県・中西

　　　　　遺跡（下層の多年生稲作法、上層で田植え方式）。愛知県朝日遺跡での魚骨検出

　　　　　の季節変化（後期）。静岡県曲金北遺跡群（古墳時代）。

　　　・　縄文Vs弥生あるいは渡来人との抗争とみられるが、稲作方式の相違による集団

　　　　　間の抗争である。

　　　①　森岡秀人氏の弥生時代集落論を借用。

　　　　A型の集落は多年生稲作法が伝わる時代に相当するか、稲作の東進・北進が停滞

　　　　　していた時代の東日本のナラ林文化圏が相当しよう。

　　　　B型は多年生稲作法を受け入れた集落。

　　　　C型は多年生稲作法に朝鮮半島との往来の中でもたらされた、畠作や行われてい

　　　　　たかもしれない中国型稲作の周辺の技や器物を受け入れた集落。

　　　　D型は新たに伝来した中国型稲作を受け入れた集落。

　　　　E型は中国型稲作を受け入れた集落のフロンティア活動によって生じた集落。

　②　福岡県板付遺跡の環濠と住居。兵庫県大歳山遺跡などの集落焼損。畿内環濠住

　　　居（弥生都市？誕生）。→『後漢書』『三国志』倭国大乱？。

　　・　指導者の下で集落範囲の拡大→騎馬文化。蓄耕の否定（水耕作用・出土馬把の

　　　　形状・律令時代の寺社財物帳と開墾記録）。

　（3）田植え方式の特質と刈り鎌

　　　・田植え方式の特徴

　　　①　古い稲株を表土の下に埋めて腐植として蓄え、これを嫌気性微生物によって

　　　　緩やかに分解させて、田を肥沃にする。

　　　②　田植えをするために抜根・踏み込み、均し攪拌が行われることにより、事前

　　　　に除草ができる。また苗と雑草との生育差を利用しての除草ができるが、実用

　　　　化は後述するが鎌倉時代以後である。

　　　③　田植えをするために整地攪拌が行われることにより、微生物群・微小動物群の

　　　　活動が活発化し、田を肥沃にする。

　　　④　秋冬の水不足で越年株は痛む可能性が大きく収穫が激減するが、その影響が

　　　　なくなる。「」は下々田で、多年生稲作法では不輸田となりやすい。

　　　⑤　①②③の効果によって、収穫量が大きく増大する。田に入る頻度が増して畦

　　　　を強固に築く必要があり、小畦では対応できず田の面積が少なくなるが十分に

　　　　それを上回る。

　　　⑥　大量の種籾が必要で、それを毎年安定的に発芽させる技と、それを行う時期

　　　　を決める暦が必要である。

　　　⑦　発芽成長・移植の時期を揃えるため、品種を選別せねばならない。

　　　⑧　田植えに備えた整地作業と移植作業、秋の収穫に農具が必要となり、それら

　　　　の作業時期には集中的な労力が求められる。

　　　⑨　移植によって一時的に成長を止める大きなリスクを伴う。単年度の一発勝負

　　　　になる。

　　・　技法転換事例・静岡県曲金北遺跡群（古墳時代）

　　　　数千枚の小区画水田が多数出土した。雑草の異常に多い田や、ヨシの茂った田

　　　　が随所にあるのが特徴的である。→多年生稲作から田植え方式への転換を示す

　　　　のではないか。労力不足、多年生稲作法を保険として。「D型集落」であろう。

　　・　指導者の豪族化→威信財を求める（朝鮮半島系遺物の大量出土）。

　（4）班田制度での営農

　・　班田収授法（大宝元年〈七〇一〉）は井田制の翻訳で「軍法・陣法」である。

　・　班田された面積では稲作が生業にならない。租庸調を果たす労役が、現行稲作

　　　法では充足できない。稲作を生計の中心に据え、公田小作・労力提供、山野の

　　　利用などを副業。→農民像の再検討。

　　　・　「出挙」は種籾であるとはいえない。多年生稲作法の収穫量と租税量からみれ

　　　　　ば、端境期の食糧を貸付けて利息を取る戦時・準戦時税制の側面が大きい。

　（5）多年生稲作法から田植え方式への転換過程

　　　・　労力が掛けられるか、庸調負担と兼業の比重の大小。

　　　・　天災での対応。多年性稲作法では全滅する可能性が大きい。乾田化→やむなく

　　　　　田植え方式を行う可能性が高い。逆に湿田では労力から多年生稲作法を行う。

　　　・　一二世紀の荘園での収穫量。平均三斗の斗代で、四升の田も存在する（田植え

　　　　　の手間が掛けられない稲作法である）。

1. 田スキ技法の導入と稲作の変化

　（1）田スキとは

　　　・　正倉院御物の「子日手辛犂」→土質・土壌条件の克服。（拙著『中近世農業史の

　　　　　再解釈―『清良記』の研究』第Ⅲ部第一章第三項目）

　　　・　田スキの技・「古代の農業革命」→大開墾の背景。

　（2）古代農業革命の実態

　　　・　越前桑原荘の例。田スキ用具が無い。→失敗・責任者の逃亡の一因。

　　　・　乾田の増加→「かたあらし」の増加。

　（3）田植え方式への移行

　　　・　乾田の増加により多年生稲作法ができない。

　　　・　定田と佃。定田の平均斗代は三斗、佃は概ね一石四斗で種籾が三～三・五斗の

　　　　　記述が伴う（一二世紀。一三世紀には一・八斗程度、十七世紀には五升程度）。

　　　・　越前国「荘実検取帳目録」（建長六年〈一二五九〉）には、佃の項目はなく

　　　　　「田数二八町一反　分米一六七石八六九」となる。→斗代〇・五九六余石、単

　　　　　純に二倍が収穫量とすれば一・一九二石を示し田植え方式の全面的に転換して

　　　　　いる。→田植え方式が一般化するのは平安時代。労力の問題が大きい。

　（4）中世の稲作農法の転換

　　　・　『枕草子』の描く山城国の農業。

　　　・　乾田が増える→田植え方式→刈鎌の普及→除草作業の採用（鎌倉時代）。稲株間

　　　　　隔の精度。水田稲作も人が入り表土を撹拌するところから「中耕」。田中耕司氏

　　　　　の分類である「群落の農法」から「個体の農法」への転換（「多労」を厭わない

　　　　　「日本型農法」の下地となる）。

　（5）古代末期から中世のフロンティア社会

　　　・　田スキの技による社会経済体制の再編。→武家政権の成立。

1. 荘園について・中世農業経営の背景

　（1）播磨国矢野荘　（平安時代から室町時代まで見通せる）

 　・　大唐米・二毛作の変遷の舞台。

　　　・　永仁五年（一二九七）にが行われ、「悪党」が生まれる（『峰相記』）。

　　・　永和三年（一三七七）一月一四日に「惣荘一揆」が起こる（労役の過徴）。

　（2）上野国新田荘　（平安時代から戦国時代初期）

 　・　南北朝・室町時代を開いた経済的背景（庶子相続）。

　　　・　田スキによる開墾。一三世紀に畠作村が成立する（第七章）。

　（3）丹波国大山荘　（鎌倉時代）

 　・　大唐米の初出（第六章）。

　（4）京郊荘園　（平安時代から太閤検地）

　　　・　多年生稲作法の名残と、近世農業への見通し。

1. 二毛作と大唐米

　（1）二毛作の始まり：第一次二毛作

　　　・　養老六年（七二二）の詔（第一章〈3〉掲出）。

　　　・　承和七年（八四〇）の太政官符「陸田をるべき事」。「水田を務めず変へて陸

　　　　　田と為す」との文言が登場している。

　　　・　西国では一一世紀頃から普遍的にみられる。「太神宮検非違使伊勢某状案」（元

　　　　　永元年〈一一一八〉）。『高野山』田畠譲り状、寄進状。矢野荘では年三度の徭役

　　　　　が課せられている（「仮寧令」では年二度〈官人休暇規定〉）。

　（2）大唐米の導入とその影響

　　　・　丹波国大山荘で徳治三年（一三〇八）に初出。

 ・　食糧供給エネルギーの増大。矢野荘のでは、麦が主穀補完作物の地位を失

　　　　　っている期間があることを示している。

　　　・　水田開墾の二番手作として開墾を助ける。

　　　・　第一次二毛作田に大唐米が作付されることにより、村の労働事情を変える（第

　　　　　一次二毛作の衰退によって最下層民を不要とする）。→村外流失（非農民化）。

　（3）近現代に続く二毛作の始期；第二次二毛作

　　　・　矢野荘では大唐米価格の低落。→総惣一揆（永和三年〈一三七七〉一月一四日）・

　　　　　労力の取り戻し（水田除草・第二次二毛作）。

　　　・　矢野荘では康暦二年（一三八〇）頃に本格的に始まる。→　箍桶の普及。

　　　・　し尿肥料の始期文献「永平寺知事清規」（寛元四年〈一二四六〉）頃（第七章）

　　　　　を下限に遡れる可能性がみえる（『高野山』文書では一二世紀？）。

　（4）第二次二毛作のもたらしたもの

　　　・　畜耕。→牧地の必要性、刈敷採集地の必要性。

　　　・　米・大唐米・麦総和の食糧供給エネルギーの大幅な増大。

　　　・　水田での「日本型農業」の基礎・「中世農術の祖型」が完成する。

　　　　　湿田で労力を掛けない真米単作、乾田での真米（早稲から中稲）と麦裏作の二

　　　　　毛作（地域と面積は限られるが）、開墾田・貧肥田・山際での大唐米→リスク・

　　　　　労力分散・灌漑水の分散活用。

1. 箍桶（肥桶）の登場

　（1）箍桶登場の前後

　　　・　一一世紀に伝来。

　（2）し尿の肥料化

　　　・　入宋僧の活躍。

　　　・　「泉涌寺殿堂房寮色目」（承久三年〈一二二一〉）。汲み取り式便所使用規定。

　　・　「永平寺知事清規」（寛元四年〈一二四六〉）。し尿の施肥を比喩に用いている。

　（3）箍桶（肥桶）実用化の成果

　　　・　フローからストックへ。窒素肥料の調達→団粒構造化。

　（4）箍桶と農術

　　　・　一三世紀に畠作村が登場→新田義貞・足利尊氏の討幕（元徳二年〈一三三〇〉）

　　　　　の経済的背景。

　（2012・9第313回例会報告「箍桶が中世社会におよぼしたもの－箍桶（肥桶）と中世農業」〈ホームページ「新・農業通信」1号〉に、少し書きく加えた。）

1. 農術の展開からみえたもの（問題提起を含めて）

　（1）農術の変遷のまとめ（第一章から第七章の概観）。

　　　・　戸田芳実氏の生産力への回答が第四章の田スキ。

　　　・　網野善彦氏への回答が第六章・第七章。

　（2）考古学での農業

　　　・　法的需要を消化する「掘古学」となっている。

　　　・　金関怨・佐原真両氏の弥生時代遡及論への異議。それを踏襲して飛躍させてい

　　　　　る研究者への批判。

　（3）見落とされた稲作法：ひつじ米

　　　・　切り株から生えるひつじ米の意義とそこから生まれる諸問題（刈り鎌）。

　　　・　琉球島嶼部で朝鮮半島漂着民の記録。「マレ―型稲作」が行われていたことの確

　　　　　認。近世でのひつじ米の利用実態。

　（4）稲作の多様性

　　・　①直播・移植・田植え→成長→穂摘み→立ち枯れ→（越年株）→ひこばえ→

　　　　　成長→穂摘み→立ち枯れ→・・・（多年生稲作法）

　　　　②田植え→成長→穂摘み＊根処理→田植え→成長→穂摘み＊

　　　　③田植え→成長→刈り取り＊根処理→田植え→成長→刈り取り＊

　　　　④田植え→成長→刈り取り→ひつち→ひつち米＊根処理→田植え→成長→刈

　　　　　り取り→ひつち→ひつち米→＊　　（＊は断絶・年度変わりを示す）

　　　・　多年生稲作法の耐寒性。

　　　　　現在の宮城県では「全国平均の四―五割」の収穫（『和名抄』『延喜式』）。

　（5）農業と宗教

　　　・　「農蓺」の祈りから。

　　　　　①　皇室には収穫の祭りしかない（新嘗祭）。「お田植え」は昭和天皇が始めた。

　　　　　　　→皇王の祭祀権（古代中国の籍田）。「古代日本型稲作」との関わり（始ま

　　　　　　　りがない）。

　　　　　②　天地への祈り・自然信仰。神と巫女→卑弥呼（「中国型稲作」との関わり）。

　　　　　③　秦氏渡来（三～四世紀に比定される）から土地の神に「技」が結び付く（伏

　　　　　　　見稲荷大社＝稲作〈狼＝土地神から狐＝野鼠の天敵へ〉・松尾大社＝酒造・

　　　　　　　養蚕神社＝養蚕）。

　　　　　④　仏教伝来・教義に農業や土木などが含まれていた（六世紀～）？

　　　　　　　宇佐神宮の荘園開発は寺社が行った？宇佐の成功例に倣い開発武士による

　　　　　　　「八幡信仰」に転化する？

　　　　　⑤　「神はことあげしない」は「神がことあげできなくなった」？寺社荘園の増

　　　　　　　加（一〇～一一世紀ごろから）。

　　　　　⑥　入宋僧のもたらした律・密・浄土・禅の教義。大唐米？・箍桶・味噌醤油。

　　　　　　　受益者となる開発武士・職人・搾油醸造業者・商人・工人など民衆仏教の

　　　　　　　拡大（一二世紀～一三世紀）。

　　　　　⑦　蓮如の講、一向一揆。河口デルタの開墾（三河、加賀、越前、尾張長島、

　　　　　　　播州英賀保、紀州雑賀、大坂・一五～一六世紀）。→「無縁の地」が有縁。

　（6）中世から近世への胎動

　　　・　第4章（5）では水田面積の大きな拡大があつて中世に移るが、第六章以後に述

　　　　　べた中世の大唐米の伝来普及、箍桶を用いた第二次二毛作・下位品位田の増収・

　　　　　常畠面積の拡大、デルタ開墾といった農業変革を再編する活動が戦国時代に相

　　　　　当し、近世が始まる。

終章　おわりに

　〔主要参考文献〕

序章

・古島敏雄『古島敏雄著作集』（東京大学出版会、一九七五年）。

・黒正巌『黒正巌著作集』（思文閣出版、二〇〇二年）。

第一章

・安田善憲『環境考古学事始』（日本放送出版協会一九八〇年、再版・洋泉社、二〇〇七年）。

　同『大河文明の誕生』（角川書店、二〇〇〇年）。

・原宗子「中国農業の歴史的基礎－「草地」の欠如を軸に―」（石原淳一・内田知行・篠田

　隆・田島俊雄編『途上国の経済発展と社会変動』緑陰書房、一九九七年）。同『古代国家

　の開発と環境』（研文社、一九九四年）。同『「農本主義」と「黄土」の　発生－古代国家

　の開発と環境2』（研文社、一九九四年）。

・井黒忍「前近代華北における水利権売買」（関西農業史研究会第三三四回例会報告、二〇一四

　年一一月例会報告）レジュメ。

・畑井弘『律令・荘園体制と農民の研究―焼畑・林田農業と家地経営―』（吉川弘文館、一

　九八一年）。

・青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注『続日本紀』第一巻（新日本古典文学大

　系、岩波書店、一九八九年）巻第三、

・『二十四史（七）晉書』（臺灣商務印書館印行、一九七三年）。

・永田英正・柳原郁訳注『漢書食貨・地理・溝洫志』（平凡社、一九八八年）。

・筒泉堯・堀尾尚志「古代農業の数量的把握－鉄・鉄製農具を中心として－」（『技術と文

　明』一四巻二号二七冊、二〇〇四年）。

・竹本豊重・石井進「対談　新見荘を語る」（石井進編『中世の村落と現代』吉川弘文館、

　一九九一年）

・岡光男『近世農業の展開』（ミネルヴァ書房、一九九一年）。

・德永光俊『山本家百姓一切有近道』（日本農書全集第二八巻、農山漁村文化協会、一九九

　一年）。

・田村栄太郎「「カナリ」耕法と「窓鍬」を創出して功労賞（表森田庄五郎）」（『人物・近

　代産業文化史』雄山閣出版、一九八四年）。

・大蔵永常著堀尾尚志解題・校訂『農具便利論』（『日本農書全集』第一五巻、農山漁村文

　化協会、一九七七年）。

 ・山田琢『山田方谷』（叢書・日本の思想四一、明徳出版社、一九七七年）。『高梁市史』（高

　梁市、一九七九年）。

第二章

・渡部忠世「稲作文化の現代的課題」（渡辺忠世著作代表『稲のアジア史1－アジア稲作文

　化の生態基盤』（小学館、一九八七年）。同『アジア稲作の系譜』（法政大学出版局、一九

　八三年）。同『稲の道』（日本放送出版協会、一九七七年）。

・高谷好一「アジア稲作の生体構造」（渡辺忠世著作代表『稲のアジア史1－アジア稲作文化の

　生態基盤』小学館、一九八七年）。

・佐々木高明『日本文化の源流を探』（海青社、二〇一三年）。

・田中耕司「稲作技術の類型と分布」（『稲のアジア史1－アジア稲作文化の生態基盤』小学

　館、一九八七年）。同「マレー型稲作の広がり」（『東南アジア研究』二九巻三号一九九一

　年）。

・石垣市教育委員会文化財課『石垣島東海岸の津波石（つなみふうしい）群』（石垣市ホー

　ムページ、電子版）。

・沖縄県土木建築部海岸防災課『沖縄県津波被害想定調査業務委託報告書〈概要版〉平成

　二五年〈二〇一三〉（石垣市ホームページ、電子版）

・来間泰男『〈琉球国〉と〈南島〉』（日本経済評論社、二〇一二年）。

・金関丈夫「古代日本文化の源流―八重山群島をめぐって―」（黒潮文化の会編『日本民族

　と黒潮文化』角川書店、一九七七年）。

・田中耕司「フロンティア社会の変容」（野暢編集責任『地域研究と「発展」の論理』弘文

　堂、一九九三年）。同「東南アジアのフロンティア論にむけて・開拓論からのアプローチ」

　（坪内良博編『〈総合的地域研究〉を求めて』京都大学出版会、一九九九年）。

・德永光俊『日本農法史研究―畑と田の再結合のために―』（農山漁村文化協会、一九九七

　年）。同「東南アジア農業を比較史的にどう見るか」（『大阪経大論集』第六一巻一号、二

　〇一〇年）。

・中村純「菜畑遺跡の花粉分析」（唐津市編『菜畑』唐津市、一九八二年）。

・ 笠原安夫「菜畑遺跡の埋蔵種実の分析・同定研究」（唐津市編『菜畑』唐津市、一九八

　二年）。

・寺沢薫・知子「弥生時代植物質食料の基礎的研究」（『考古学論攷』第五冊、橿原考古学

　研究所紀要、一九八一年）。寺沢薫『王権の誕生』（『日本歴史』第二巻、講談社、二〇〇

　〇年）。

・武田幸男『朝鮮史』（山川出版社、二〇〇〇年）。

・井上秀雄『実証　古代朝鮮』（日本放送出版協会、一九九二年）。

・韓国考古学会編・監訳者武末純一・訳者庄田慎矢・山本孝文『概説　韓国考古学』（同成

　社、二〇一三年）。

・高橋昇著・飯沼二郎・高橋甲四郎・宮嶋博史編『朝鮮半島の農法と農民』（未来社、一九

　九八年）。

・飯沼二郎「日帝下朝鮮における農業革命」『植民地朝鮮の社会と抵抗』（未来社、一九八

　二年）。

・笠原安夫「日本における作物と雑草の系譜（1）（『雑草研究』Vol21.No1、一九七六年）。

・李弘鐘「弥生成立期における韓半島土器の問題」（武光誠・山岸良二編『古代日本の稲作』

　（雄山閣出版、一九九四年）。

・池橋宏『稲作の起源』（講談社、二〇〇五年）。同『稲作渡来民―「日本人」成立の謎に

　迫る』（講談社、二〇〇八年）。

・有薗正一郎『ヒガンバナが日本に来た道』（海青社、一九九八年）。

第三章

 ・森岡秀人「初期水田の拡大と社会変化」（金関怨・大阪府弥生文化博物館編『弥生文化

　の成立』角川書店、一九九五年）。同「水田稲作の普及―縄文人と弥生人の遭遇」（森岡

　秀人・中園聡・設楽博己『稲作伝来』先史日本を復元する四、岩波書店、二〇〇五年）。

・奈良県立橿原考古学研究所・京都大学大学院農学研究科「弥生前期水田管理の実態解明」（二〇一三年、電子版）。

・伊藤淳史「京都大学構内遺跡における弥生前期水田調査」（『京都府埋蔵文化財情報』京

　都府埋蔵文化財調査研究センター、一九九五年）。

・秋山浩三『弥生大型集落の研究』（青木書店、二〇〇七年）。

・佐藤洋一郎『稲の日本史』（角川書店、二〇〇二年）

・林羅山「陣法」（『林羅山著作集』京都史跡会編纂、一九三〇年）。

・三橋時雄『日本農業経済史の研究』（ミネルヴァ書房、一九七九年）。

・瀧川政次郎「公出挙による融通」『律令時代の農民生活』（名著普及会、一九八八年）。

・澤田吾一『奈良町時代の民政経済の数的研究』（柏書房、一九七二年）。

・安藤広太郎「日本稲作起源と発達」（稲作研究会盛永俊太郎『稲の日本史』上、筑摩書房、

　一九六九年）。

・田中耕司「根菜農耕と稲作－「個体」の農法の視点から－」（吉田集而・堀田満・印東道

　子編『イモとヒト』平凡社、二〇〇三年）。

第四章

・ 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』（岩波書店、一九八九年）

・ 鋳方貞亮『農具の歴史』（至文堂、一九六五年）

・ 有薗正一郎『在来農耕の地域研究』（古今書院、一九九七年）

・ 拙著『中近世農業史の再解釈―『清良記』の研究』（思文閣出版、二〇一一年）

・ 竹内理三編『寧楽遺文』中巻（東京堂出版、一九六二年）下巻（一九六五年）

・ 三浦圭一『中世民衆史の研究』（思文閣出版、一九八一年）

・ 竹内理三編『平安遺文』古文書第五巻（東京堂出版、一九六三年）

・ 竹内理三編『鎌倉遺文』古文書編第一〇巻（東京堂出版、一九七六年）

・ 『西脇市史』史料編（西脇市、一九七六年）

・ 西岡虎之助『荘園史の研究』（岩波書店、一九五三年）

・ 永原慶二『日本中世社会構造の研究』（岩波書店、一九七三年）

・ 渡辺実校注『枕草子』（新日本古典文学大系二五、岩波書店、一九九一年）

・『群馬県史』通史編三中世一（群馬県、一九八九年）

・ 三浦励一「農諺「上農は草を見ずして草をとる」の来歴」(関西農業史研究会第三三三回例会

　報告、二〇一四年一〇月例会報告）レジュメ。

第五章

・神栄赴郷『播磨の地誌　 峰相記の研究』（郷土志社、一九八四年）。

・『相生市史』第一～二・七・八巻上下（相生市、一九八四～一九九二年）。

・『兵庫県史』第一・二・三巻・史料編中世第一・二・三・四巻（兵庫県、一九七四～一九

　九八年）。

・網野善彦『中世東寺と東寺領荘園』（東京大学出版会、一九七八年）。

・赤松啓介『百姓一揆』（明石書店、一九九五年）。

・上島有・大山喬平・黒川直則編『東寺百合文書を読む』（思文閣出版、一九九八年）。

・東寺文書研究会編『東寺文書と中世の諸相』（思文閣出版、二〇一一年）。

・網野善彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編『講座日本荘園史八近畿地方の荘園』（吉川弘

　文館、二〇〇一年）。

・大山喬平『日本中世農村史の研究』（岩波書店、一九七八年）。

・大山喬平編『中世荘園の世界―東寺領丹波大山荘』（思文閣出版、一九九六年）。

・『群馬県史』通史編三（群馬県、一九八九年）・資料編五中世一（群馬県、一九七八年）。

・峰岸純夫「東国武士の基盤」（稲垣康彦編『荘園の世界』東京大学出版会、一九七三年）。

・石井進編『中世のムラ』（東京大学出版会、一九九五年）。

第六章

・河音能平『中世封建成立史論』（東京大学出版会、一九七一年）。

・嵐嘉一『日本赤米考』（有山閣、一九七四年）。

・福嶋紀子「矢野荘散用状に見られる大唐米」（東寺文書研究会編『東寺文書にみる中世社

　会』東京堂出版、一九九九年）。

・山田龍雄『九州農業史研究』（農山漁村文化協会、一九七七年）

・上島有『京郊庄園村落の研究』（塙書房、一九七〇年）。

第七章（省略）

第八章

・佐原真・金関恕編『古代史発掘4　稲作の始まり・弥生時代』（講談社、一九七五年）。

・佐原真「弥生土器入門」（佐原真編『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社、一九八三年）。

　佐原真編『古代を考える　稲・金属戦争―弥生―』（吉川弘文館、二〇〇二年）。

・佐原真著金関恕・春成秀彌編『佐原真の仕事2　道具の考古学』、『佐原真の仕事6　考古

　学と現代』（いずれも岩波書店、二〇〇五年）。

・関周一『朝鮮人がみた中世日本』（吉川弘文館、二〇一三年）。

・『宮城県史』一（宮城県、一九五四年）一五二～一五五頁。高橋富雄「古代における陸奥

　国」（『文化』第一七巻第三号、一九五三年）に拠っている。

・村上重良編『皇室辞典』（東京堂出版、一九八〇年）。

・中村陽監修『稲荷大神』（戎光祥出版、二〇〇九年）。

・田村義次郎「伏見稲荷大社の歴史的信仰」（『伏見稲荷大社』淡交社、二〇〇四年）。

・平雅行『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）。